

いのち 生命のにぎわいとつながり

No. 71

令和3年9月

これまで見られなかった生きものが、野外で見られるようになるのは嬉しいことです。しかし、それが人間活動の影響で入ってきたものであったなら、話は違ってきます。今号の巻頭では、千葉県で新たに記録された国内外来種・リュウキュウベニイトトンボについて特集します。

国内外来種・リュウキュウベニイトトンボの侵入



リュウキュウベニイトトンボ（鹿児島県にて撮影）

「国内外来種」とは、海外ではなく、日本国内の別の地域から、もともと自然に分布していなかった地域に人間の活動によって持ち込まれた生物のことを指します。今号の「千葉県の外来種」でとりあげているヌマガエルもその一例です。そしていま千葉県は新たな国内外来種の侵入に直面しています。それはリュウキュウベニイトトンボというトンボです。

CONTENTS

- 1 国内外来種・リュウキュウベニイトトンボの侵入 1
- 2 ヒアリと誤解されやすい在来の生きものたち 3
- 3 幻じゃなかった！？ シロマダラ — 生命のにぎわい調査団の報告から — 4
- 4 千葉県の外来種（ヌマガエル） 4

◎「生命のにぎわい調査団」への報告

2021年7月、生物多様性センターが主催する県民参加プログラム「生命のにぎわい調査団」に、八千代市在住の団員の方から、ベニイトトンボの発見報告が寄せられました。ベニイトトンボは、千葉県レッドリストでは「A（最重要保護生物）」、環境省レッドリストでは「NT（準絶滅危惧）」にランクされている希少種です。しかし、送られてきた写真に写っていたトンボは、ベニイトトンボではありませんでした。ベニイトトンボによく似てはいますが、本来、千葉県には生息していないはずのリウキュウベニイトトンボだったのです。



上・八千代市から報告されたリウキュウベニイトトンボ
下・過去に生命のにぎわい調査団に報告されたベニイトトンボ

◎リウキュウベニイトトンボの拡散

リウキュウベニイトトンボは、イトトンボ科に属する、全長35～45mmほどの細くて赤いトンボです。ベニイトトンボとは、雄の複眼の緑色味が強いこと（ベニイトトンボの複眼は赤っぽい）などで区別できます。九州南部から南西諸島に分布し、平地から丘陵地の水生植物の多い池沼などで発生します。

ところが近年、神奈川県や東京都など、本来の生息域から遠く離れた場所で、リウキュウベニイトトンボが記録されるようになりました。このことには、幼虫、すなわちヤゴの時代を水中で過ごすというトンボ本来の生態、そして、上に述べたように水生植物の多い場所でヤゴが育つというこの種の生態が深く関係しています。

実は、リウキュウベニイトトンボは、ホテイアオイやハスといった水草の移動に伴って拡散してき

たと考えられているのです。つまり、本来の生息域である九州南部以南で栽培された水草にヤゴが付着しており、それがそのまま出荷されて各地の熱帯魚店や園芸店などで販売されたことで、本来の生息域ではない地域でも見られるようになった……というわけです。リウキュウベニイトトンボのようなイトトンボ科のトンボは、長距離を飛翔する能力に乏しいので、その分布域の拡大は、こうした人為的な要因が大きく作用しているのです。

◎八千代市に出現したリウキュウベニイトトンボ

今回、「生命のにぎわい調査団」に報告が寄せられたリウキュウベニイトトンボは、報告者の方の自宅の庭で観察されたものでした。この庭では水槽を並べてメダカを飼育しており、水槽にはアナカリスやスイレンが入れられていました。これらの水草は、3年前に県内のホームセンターで購入したもので、まさにその3年前からリウキュウベニイトトンボが庭で見られるようになったとのこと。これは、神奈川県や東京都などでの事例と符合するものです。



リウキュウベニイトトンボが発生したと思われる水槽

リウキュウベニイトトンボは、ベニイトトンボと同じ場所に生息している場合、ベニイトトンボと競合し、これを駆逐してしまうことも知られています。リウキュウベニイトトンボが水草の移動と販売によって各地に拡散してゆくとするならば、今後、県内でのさらなる発生も予測されます。そして在来生態系に侵入してしまい、ベニイトトンボをはじめとする希少種に影響を与えてしまうことが懸念されます。外来生物は、いったん野外に定着してしまうと、これを排除するのは非常に困難です。

赤くて細い見慣れないトンボを見かけたら、あるいは、ベニイトトンボのようだけれども何か違和感のあるトンボを見かけたら、その時は是非、生物多様性センターまでご連絡ください。

(大島 健夫 千葉県生物多様性センター)

ヒアリと誤解されやすい在来の生きものたち

近年、千葉県内への侵入が危惧される、特定外来生物のヒアリ。生物多様性センターにも、「見慣れないアリがいた」というご相談が多数寄せられています。

それらの「見慣れないアリ」の中には、もともと千葉県に生息している在来種のアリなども含まれます。ここでは、それらの「ヒアリと誤解されやすい生きもの」について紹介します。

最初に、ヒアリそのものの特徴について紹介します。ヒアリは、南米原産のアリで、体長は2.5～6mm程度で、暗赤褐色の頭部・胸部と、黒褐色の腹部を持ち、全体的にツヤツヤとしています。

ヒアリと他のアリとの見分け方のポイントは、①^{みくへい}腹柄（胸と腹の接続部分）に2つの節があること、②触角の節の数が10節であり、先端2節が膨らんでいること、③大きさにばらつきがあり、一つの集団に様々な大きさの個体が混ざることです。



特定外来生物・ヒアリ

ただし、身体のコツが小さいため、上記の特徴の確認のためには、顕微鏡が必要です。以下では、道具がなくても、目視で違いが確認できる生きものを紹介します。

1. まず、まっさきに名前が挙がるのは、「キイロシリアゲアリ」でしょう。キイロシリアゲアリは、体長2～3mmのオレンジ色の体色が特徴的なアリです。また、女王アリ（体長約7mm）が9月～10月に街灯の下などに集団で見られます。

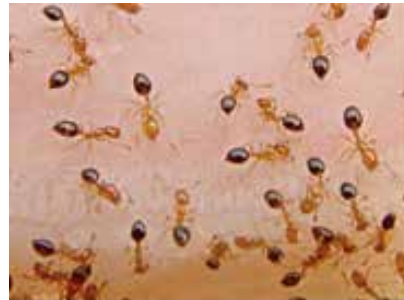
ヒアリとの見分け方は、体色が黄褐色であること、働きアリのサイズが2～3mmと揃っていること、背中から見ると、腹部がハート形なことなどが挙げられます。女王アリも、腹部がとがっており、しずく型をしているのが特徴です。



キイロシリアゲアリ（女王アリ）

2. 次によく相談のある生きものは、「ヒメアリ」です。ヒメアリは、体長1.5mmほどのとても小さなアリで、家屋の中でもよく見られます。頭部・胸部が黄褐色、腹部が黒褐色の体色をしており、フォルムがヒアリと似ていることから、ヒアリと誤解されます。

ヒアリとの見分け方は、体長が1.5mmほどとかなり小さく、集団のサイズが揃っていることなどです。



ヒメアリ（働きアリの集団）

3. 最後に紹介するのは「アリグモ」です。ここまでで紹介した2種はヒアリと同じアリの仲間ですが、アリグモは名前のとおり、クモの仲間です。

アリグモは体長5～7mmのハエトリグモの仲間です。アリに擬態し、一番前の脚を触角のように持ち上げることで、アリのように見えます。また、メスの体色が赤っぽいこともあり、ヒアリと誤解されます。

ヒアリとの見分け方は、クモなので脚が4対あること、眼が前方に複数ついていること、特にオスのあごの部分がアリよりも大きく目立つことが挙げられます。



アリグモ（♀）※生命のにぎわい調査団より

今回は、「ヒアリと誤解されやすい」3種の生きものを紹介しました。千葉県内には、他にも多くの種類のアリが生息しています。また、現時点で日本国内ではヒアリが定着しているとの情報はありません。

見慣れないアリを見かけた際は、すぐに処分するのではなく、一度観察してみたいかがでしょうか。

[参考]

環境省HP「特定外来生物ヒアリに関する情報」
<http://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/attention/hiari.html>

（家敷 貴大 千葉県生物多様性センター）

幻じゃなかった!? シロマダラ —生命のにぎわい調査団の報告から—

千葉県のレッドリストで「B（重要保護生物）」にランクされているシロマダラは、灰色の体に黒い横帯がたくさん入った美しいヘビです。新聞やテレビで、しばしば「幻のヘビ」と報道されるため、生物多様性センターにもよく問い合わせが寄せられます。

しかし、実際には、「生命のにぎわい調査団」には、2016年以降、19件のシロマダラ発見報告が寄せられており、決して報告件数が極端に少ない生きものではありません。また、その報告の内容を分析すると、興味深いことが明らかとなりました。



シロマダラ

シロマダラの発見報告は、房総丘陵から北総の都市部まで、県内の広い地域から寄せられています。特徴的なのは、19件のうち7件が死体の発見報告であること、そして、生きている個体の発見報告のうち、日中の発見例がわずかに3件しかないことです。

広く分布しているが、なおかつ日中の発見例が少なく、死体と遭遇する率が多いということ。それは、シロマダラが夜行性であり、生息域の広さと生息数に対して、人目につく機会が少ない生きものであることを示しています。シロマダラは、希少であることよりも、むしろその生態がゆえに「幻」と呼ばれるに至ったと考えられます。

とは言え、シロマダラが餌としているトカゲ類や小型のヘビ類は、現在、その全ての種が県のレッドリストに掲載されており、その今後の生息が安穏なものではないことは言うまでもありません。シロマダラは日本固有種でもあります。これからもデータの収集に努め、保全の道を探ってゆきます。

(大島 健夫/加賀山 翔一 千葉県生物多様性センター)



シロマダラの発見報告位置図
(一部非公開)

千葉県の外来種

ヌマガエル



※背中線のない個体（左）は在来種のツチガエル（千葉県レッドリスト・最重要保護生物A）と似ている

ヌマガエルは暗灰色から灰褐色をした体長30~50mm程度のカエルで、水田や湿地、河川等に生息しています。背面に見られる小さな隆起やイボ、白い腹面が特徴です。背面に白い縦線（背中線）があるものや、背面が緑味を帯びた個体も見られます。

ヌマガエルは本州の中部以西、四国、九州、奄美群島、沖縄群島に分布するカエルですが、近年では関東地方に侵入し、千葉県内でも生息範囲を拡大させています。ウシガエル等の国外外来種とは異なり、ヌマガエルは日本広域に分布する在来種ではありますが、千葉県に生息するものもともといたものではなく人為的に移入されたものであるため、国内外来種となります。詳細な侵入経路は不明ですが、稲わらや苗、土砂などに混入して非意図的に持ち込まれた可能性が指摘されています。

外来種であることから、在来生態系への悪影響が懸念されています。特に、多種多様な昆虫やクモ類等を捕食することから、これら在来種を減少させている可能性があります。また、アマガエル等の在来カエル類を捕食することも知られており、同所的に生息する在来のカエル類を駆逐してしまう恐れもあります。

研究者らの調査により、千葉県内では利根川周辺、印旛沼流域の一部や房総半島南部（鋸南町や南房総市）を中心にヌマガエルが定着し、分布を拡大させていることがわかっています。今後の分布拡大を食い止め、適切な防除対策を検討するためには、ヌマガエルの最新の分布情報を収集・蓄積する必要があります。もし、県内でヌマガエルを見かけた際には、是非とも、「生命のにぎわい調査団」（千葉県生物多様性センターが運営する県民参加型生物モニタリング）まで情報提供をお願いします。

(加賀山 翔一 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.71 令和3年9月30日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

